

雲南中国語方言の声調体系の地理分布と系譜関係

遠藤 光暁

1. 主題

小文では雲南省の中国語方言の声調体系の地理分布を描画し、それに対して各タイプの系譜関係を推定する。描画ソフトとしては Arc GIS Online を使用し、呉、顔 1986（ただし実際の作業は原載誌ではなく単行本に収められた方に基く）所掲の 1950 年代調査の 136 地点を基礎データとした。

雲南漢語方言の声調の地理分布は既に楊 1967, 呉、顔 1986, 云南省語言学会 1989 などが調類ごとに地図化している。ただし、こと音韻については、音価の変化に関して一方向性が成立するとは限らず、現に声調調値に関しても双方向に変化することが年齢差や近過去の文献との比較に基いて示されている（遠藤 2004、2015、近刊）。故に語彙の場合と異なり、ABA 分布の原則を金科玉条として適用することはできない。

一方、遠藤 1984 では西南官話全体を対象として単字調の調類の分合状況と調値に基づくタイプ分けを行い、その地理分布を地図化し、系譜関係を推定したことがあった。このたびは雲南省のみを対象としてより詳細な推定を行いたい。

2. 雲南省全体の声調のタイプ分けと地理分布

表 1 は雲南省の中国語方言に存在する声調のタイプ分けをした結果である。するとまず大類として、調類が 5 つある入声を保存するタイプ（四角の記号を与えてある）、多数派をなす 4 調類のタイプ、陰平と上声が合流した 3 調類のタイプ（十字架型の記号）、そして河口にある粵語系の 7 調類のタイプ（波形の記号）の 4 つに分かれる。

雲南省に粵語系のタイプが存在することは意外であるが、盧 1988 によると清末民国初に雲南とベトナムを結ぶ鉄道を建設するために主として広西の欽州・百色、更に部分的には広東の仏山・番禺から来たという。私が 2016 年 4 月に河口に赴いて調査したところ、確かに粵語系（ないし客家系？）の方言を話す旧来の住民もいるが、むしろ西南官話系のタイプのほうが多い如くであった。

















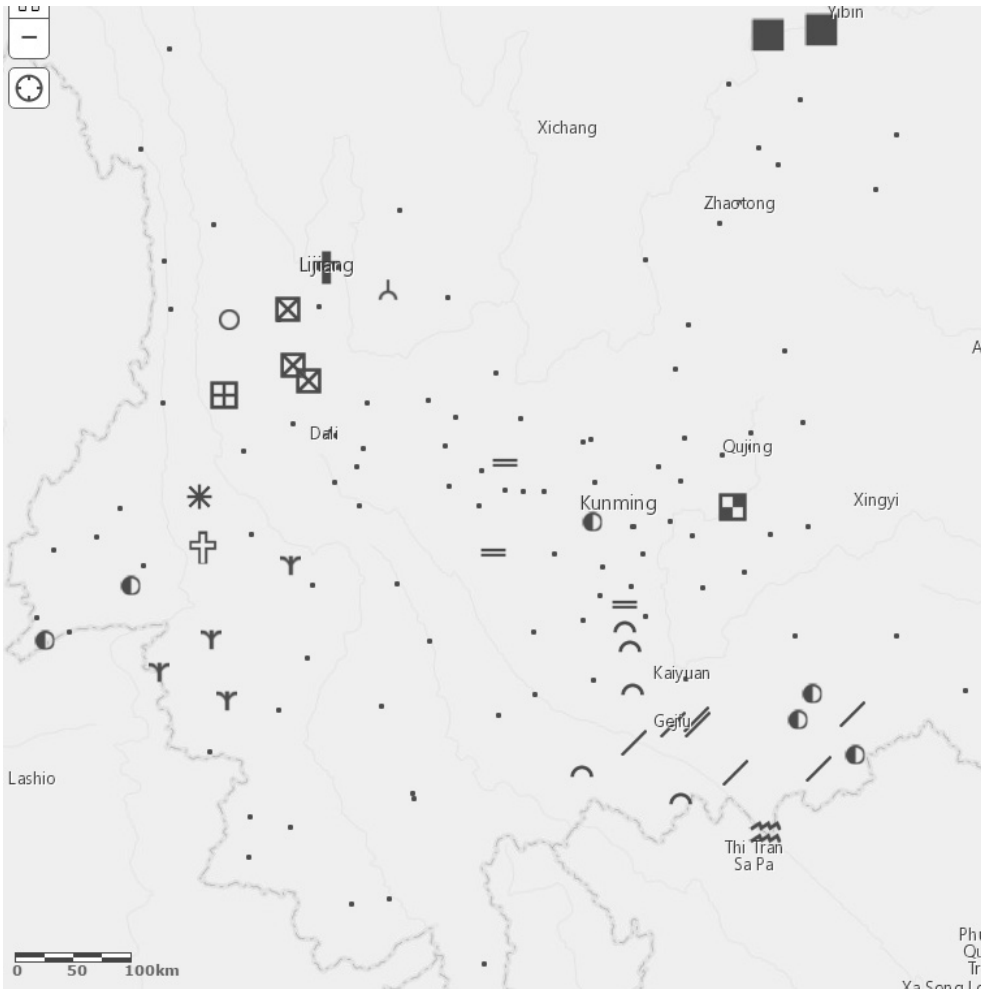
	地点	阴平	阳平	上声	去声	入声
 保留入声型1	水富	44	31	53	213	33
 保留入声型2	云龙	44	52	31	45	212
 保留入声型3	洱源	44	54	31	213	21
 保留入声型4	陆良	44	54	42	213	314
 昆明型	昆明	44	31	53	212	
 昆明型(阴平高升)	兰坪	45	31	53	213	
 昆明型(阴平高升, 去声低降)	安宁	44	31	53	211	
 阳平高降, 上声中平	蒙自	55	52	33	211	
 去声低降升, 上声中平	金平	55	31	33	213	
 阳平高降, 上声低降	双柏	55	43	21	213	
 去声高升/平	凤庆	55	31	53	45	
 去声高升, 阴平高降升	永胜	434	31	42	45	
 保山	保山	42	31	55	213	
 三调型(施甸)	施甸	55	42	阴平	212	
 三调型(丽江)	丽江	31	53	阴平	313	
 河口粤语	河口	55	31	212	44	阴入 33, 中入 21, 阳入 54

表 1 雲南漢語方言声調タイプ分け

各大類は更に調値の絶対値や相対的關係に基いて小類に区分してある。

入声を保存するタイプについては、入声が中平調 33 のタイプを「保留入声型 1」とする。この場合、陽平が低降調、上声が高降調となっており、西南官話で圧倒的多数を占めるタイプとなっている。しかし、それ以外の入声を保存するタイプでは陽平が高降調、上声が低降調となっていて、相対的關係が逆である。そのうち、去声が高昇調 45 で入声が低凹調 212 のタイプを「保留入声型 2」とし、去声が低凹調 213 で入声が低降調 21 のタイプを「保留入声型 3」とし、去声が低凹調 213 で入声が中凹調 314 のタイプを「保留入声型 4」とする。

4 調類と 3 調類のタイプでは旧入声は一律陽平に合流している。そのうち西南官話全般の傾向と同様に陽平が低降調、上声が高降調となるタイプを昆明型とする。この型が雲南省では最も多い。蘭坪では陰平が高昇調となるので区別してあるが、実は昆明市内でもこのタイプは存在し、陰平が高平調のタイプと併存している。また去声が低凹調ではなく非常に低い下降調となるタイプも区別してある。ただし、こうした変種は昆明方言でも変



地図1 雲南漢語方言声調タイプの地理分布

調においては現れ、単字調のみならず2音節・3音節における調値実現がすべての方言について知ることが出来るならばもっと声調体系の全体を反映した分類が可能となるであろう。

4 調類の方言の中には上声が中平調 33 であつたり、低降調 21 であるタイプもあり、後に見るように陽平との相対的な高低関係が逆転する中間的な様相を示す。更に去声が高昇調 45 であつたり、上声が高平調 55 であつたりするタイプも存在する。

3 調類のタイプでは陰平と上声が同一類となつており、これは相対的に新しい合流を経たタイプである。

以上のような諸タイプの雲南全体における地理分布は地図1に見られる。

以下では小地域ごとに区分してより細かく地理分布を見ていき、おのこのタイプの形成過程を推定していくこととしよう。

3. 東北部での変化過程

まず、最も単純な雲南省東北部の昭通の近辺の状況から見ていく。ここ



でも昆明型がほぼ全てを占めているが、北端の四川に接するところでは入声を保存する5調類型が存在する。即ち、

地点	陰平	陽平	上声	去声	入声
水富	44	31	53	213	33
昆明	44	31	53	212	

のように舒声の調値はほぼ同じだが、入声は $33 > 331 > 31$ のように変化して陽平に合流したこととなろう。

地図2 東北部

ちなみに、袁 1960 : 40 ; 1983 : 39 ; 2001 : 38 によると当時の成都では入声は 331 で、陽平が 31 である方言が一部保存されていたといい、このような変化が成都では現に 20 世紀前半に生じたことが分かる。

4. 東南部（河口、ベトナムとの国境近辺）

蒙自のタイプ（スラッシュの記号）が金平のタイプ（下が切れた半円の記号）に囲まれており、恐らく陽平 $31 > 52$ という新しい変化を経たものであろう。

この地域では、上声は中平調 33 であり、昆明型の上声 53 が 33 に変化したものと考えられ、その際、河口の上声の調値 212 の影響を受けた可能性がある。



地図3 東南部

その結果、蒙自型の陽平は上声より高く、相対的な関係が変化している。

地点	陰平	陽平	上声	去声
蒙自	55	52	33	211
金平	55	31	33	213
河口	55	31	212	44

陰入 33, 中入 21, 陽入 54

5. 西南部（徳宏・保山）

鳳慶型の去声は高昇か高平であり、このようなタイプは雲南省のみならず西南官話全体で他に見られない。これは近年に起こった去声 212 > 24 > 45 > 55 という変化を反映したものであろう。

地点	陰平	陽平	上声	去声
昆明	44	31	53	212
鳳慶	55	31	53	45



地図4 西南部

一方、施甸の陰平と上声は合流しており、隣接している保山と比較するとその理由が分かる。

地点	陰平	陽平	上声	去声
保山	42	31	55	213
施甸	55	42	1a	212

保山では、上声が高平調の 55 に変化したが、陰平は高降調の 42 に変化しているため合流していない。しかし、施甸においては、上声の 55 と陰平の 44 が合流したため、3 声調の体系となったことになる。

李 2010 : 262 は“施甸上声归阴平大概是上声调值抬高后与阴平调重合的结果”とし、その傍証としてやはり施甸に隣接する方言の状況を挙げている（旧入声はいずれの地点においても陽平に合流）。

地点	陰平	陽平	上声	去声
昌寧	44	31	42	325
保山	32	44	53	25
龍陵	44	41	53	214
臨滄	44	31	54	214
永徳	43	42	45	313
鎮康	43	42	45	313

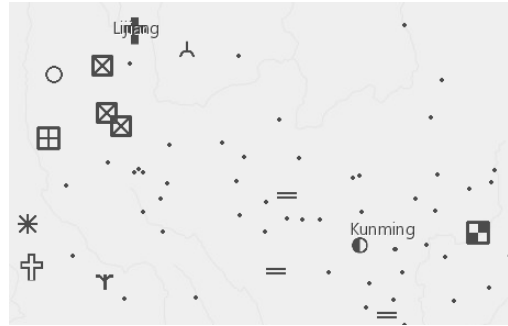
そして、“与施甸紧邻的永徳和鎮康的上声调就已抬升得高于阴平调，由于永徳和鎮康的阴平时一个次高降调，上声和阴平因此没有想混。由于施甸的阴平是一个高平调，如果上声抬升到最高平调，或阴平调上扬为高升调，阴平和上声就会同调。”と言っている。挙げている地点と調値には違いがあるものの、上声が単字調でも非末位での調値 55 に変化したことによって、陰平が高平調の方言で合流が生じたと看做す点は同様である。

陈 2012 は麗江の新派方言が昆明方言に取って代わられたことを報告している。そして声調のみならず、老派ではひとたび開音節となった鼻音韻尾が復活していることなど音韻体系全般に及ぶことを示している。

6. 麗江・大理一带と雲南中心地区

この地域では 5 声調を保つ古い体系と 3 声調に合流した新しい体系が隣り合って分布している。そして、陽平と上声の相対的な校訂関係がこうした非昆明型の声調体系では逆転している。

麗江方言では陰平と上声が合流しているが、陰平が平板調から下降長に変化したことによるようであり、施甸における状況とは異なる。



地図 5 麗江・大理および中心地区

地点	陰平	陽平	上声	去声	入声
雲龍	44	52	31	45	212
洱源	44	54	31	213	21
陸良	44	54	42	213	314
麗江	31	53	1a	313	
双柏	55	43	21	213	

7. 最後に

小文が基づいた方言資料の他、現今では雲南漢語方言に関してより多くの調査報告が出ており、そうした資料を参照することによって一層精密な議論が可能になるであろう。

参考文献

- 陈希 2012《丽江老派汉语方音的历史来源及其演变考释》《南开语言学刊》2012 (2): 64—73。
- 遠藤光暁 1984「西南官話祖調値の再構」, 中国語学会第 34 回全国大会発表資料, 6 頁, 1984 年 10 月 27 日, 於神戸大学。
- 李藍 2010《西南官話》, 钱曾怡主编《汉语官話方言研究》236—288。济南: 齐鲁书社。
- 卢开礪 1988《云南方言中的一个双方言点——河口方言述略》《玉溪师专学报》1988 (6): 52—60。
- 吴积才、颜晓云 1986—1987《云南方音概况》, 《玉溪师专学报》1986 (4): 1—35, 1986 (Z1): 1—40, 1987 (1): 1—11; 吴积才等编 (无出版年份)

《云南方言概述》1—86，昆明、玉溪：云南师范大学科研处、玉溪师专学报编辑部。

袁家骅等 1960《汉语方言概要》。北京：文字改革出版社；1983，第二版，北京：文字改革出版社；2001，北京：语文出版社。

远藤光晓 2004《从年龄差异归纳音变的方向性——以汉语荔波方言为例》，石锋、沈钟伟编《乐在其中 王士元教授七十华诞庆祝文集》168—175，天津：南开大学出版社。

远藤光晓 2015《近 150 年来汉语各种方言里的声调演变过程——以艾约瑟的描写为出发点》远藤光晓、石崎博志主编《现代汉语的历史研究》199—228，杭州：浙江大学出版社。

遠藤光曉（近刊）《20 世紀以來漢語幾個方言聲調調值史》。

云南省语言学会 1989《云南省志》58 汉语方言志。昆明：云南人民出版社。